三強が敗れる大波乱！崇徳高校が念願の初優勝果たす!!

▲初優勝を果たし優勝旗を授与される崇徳高校

今年度の高校柔道を締めくくる、平成25年度第62回全国高等学校総合体育大会柔道競技（インターハイ）の男子団体戦は、8月7・8日の両日、福岡市民体育館において開催された。優勝候補の筆頭に挙げられていた東海大学付属浦安高校（千葉県）がまさかの四回戦敗退。そして、東海大学付属相模高校（神奈川県）が三回戦、国士舘高校（東京都）も準決勝で敗れるという波乱の連続となった今大会は、ダークホース・崇徳高校（広島県）の初優勝で幕を閉じた。

二年連続で「高校柔道団体三冠」を狙った東海大学付属浦安高校は、準々決勝で修徳高校（東京）に2―3で敗れ、快挙の達成は成らなかった。

東海大学付属相模高校が初日に敗退。波乱の幕開け

金鷲旗高校柔道大会から約二週間。金鷲旗では東海大学付属浦安高校が、春の全国高校柔道選手権大会に続く優勝を果たし、「高校三冠」に王手をかけており、今大会も優勝候補の筆頭として注目されていた。

その東海大学付属浦安高校は初戦の仙台育英高校（宮城県）を5―0、二回戦の明桜館高校（鹿児島県）を3―0、そして三回戦の大垣日大（岐阜県）を5―0と、危なげなく2日目に進出。

そんななか、金鷲旗準優勝の東海大学付属相模高校も、初戦の東海大学付属山形高校（山形県）、二回戦の佐賀商業高校（佐賀県）と、ともに5―0で下して快調な滑り出しを見せたが、続く三回戦の崇徳高校に、1―4というスコアでのまさかの敗北。実力的に大差はないと思われていたものの、実績・総合力では一枚上と定評だった東海大学付属相模高校だけに、初日敗退はまさに波乱。これが幕開けとなり、今大会は荒れ模様となっていった。

優勝候補筆頭の東海大学付属浦安高校がまさかの四回戦敗退

▲優勝候補の東海大相模が崇徳高校にまさかの敗退。三回戦で姿を消した

二日目の四回戦に進出したのは、崇徳高校、大牟田高校（福岡県）、修徳高校、東海大学付属浦安高校、作陽高校（岡山県）、天理高校（奈良県）、東海大学付属甲府高校（山梨県）、国士舘高校の8校。

三回戦で東海大学付属相模高校を破った崇徳高校は、二回戦では、東海大学付属仰星高校（大阪府）に2―2の内容で競り勝っての勝ち上がり。また、地元・福岡の大牟田高校も、初戦の四日市中央工業高校（三重県）に1―1の内容、二回戦の平田高校（島根県）に3―2、三回戦の埼玉栄高校（埼玉県）に2―1と、いずれも薄氷の勝利だった。

◆四回戦（準々決勝戦）
崇徳高校vs大牟田高校
修徳高校vs東海大学付属浦安高校
作陽高校vs天理高校
東海大学付属甲府高校vs国士舘高校

四回戦では、優勝候補の筆頭と思われた東海大学付属浦安高校が、修徳高校に2―3で敗れる大波乱が起きた。

修徳高校は、先鋒戦で前野玲音が「指導4」で反則勝ちして1点を先行すると、続く次鋒戦では、佐藤竜が東海大学付属浦安高校のポイントゲッター・前田宗哉に、「有効」を取られるだけに留めて流れを変えさせずに中堅戦に繋ぎ、小川雄勢がその踏ん張りに応えて「有効」で優勢勝ち。勢いそのままに、副将・坂口真人が思い切りのいい内股で「一本」を奪って、大将戦を前に勝負を決めた。東海大学付属浦安高校はエースのウルフ・アロンが小外刈で一本勝ちを果たすも時すでに遅し。東海大学付属浦安高校は四回戦で姿を消すこととなった。

▲修徳・副将の坂口が豪快な内股で一本勝ち。東海大浦安高校まさかの敗退

その他の試合も接戦続きとなったが、崇徳高校は大牟田高校を2―1、作陽高校は天理高校を2―1。そして、国士舘高校は東海大学付属甲府高校を4―1で破り、準決勝進出を果たした。

国士舘高校も準決勝で苦杯。決勝は予想外の崇徳高校vs作陽高校

優勝候補の東海大学付属浦安高校、東海大学付属相模高校の両校が四回戦前に姿を消し、準決勝は崇徳高校vs修徳高校、作陽高校vs国士舘高校という予想外のカードとなった。

まずは崇徳高校と修徳高校の対戦。

先鋒戦引き分けの後の次鋒戦で、崇徳高校はエースの香川大吾が修徳高校・佐藤竜に崩袈裟固で一本勝ちをして1点を先制。しかし、中堅戦では修徳高校・ポイントゲッターの小川雄勢が反則勝ちで1点を取り返してタイに。崇徳高校は副将戦で三村暁之が右払巻込「技有」で優勢勝ちをしてリードすると、最後は大将の貫目純矢が原澤脩司と手堅く引き分け、2―1で決勝進出を決めた。

▲準決勝。崇徳高校副将の三村が払巻込で「技有」を奪う

もう一方の準決勝、作陽高校vs国士舘高校も息詰まる接戦となった。先鋒戦、次鋒戦と引き分け後の中堅戦、作陽高校の安田隼人が「有効」で優勢勝ちをして貴重な先制点を奪取。しかし、国士舘高校はポイントゲッターの江畑丈夫がすかさず「指導2」で優勢勝ちをして追い付き、1―1の同点で大将戦を迎えることとなった。

作陽高校・寺尾拓真と国士舘高校・田崎健祐の一戦。田崎が序盤に内股で「有効」を奪い、そのまま逃げ切るかと思われた終了間際、寺尾が一か八かの抱きつきの小外刈りにいくと、田崎は大内刈りで切り返そうとするも寺尾がさらに踏み込み、返して「一本」。劇的な逆転勝ちで作陽高校の決勝進出が決まった。

▲準決勝で国士舘高校に逆転勝ちし歓喜にあふれる作陽高校の選手達

▲内股で攻める崇徳高校・先鋒の野々内（惜しくも回り過ぎてポイントなし）

崇徳高校が中国地区対決を制し、インターハイ初の栄冠！

四回戦以降の6試合のうち、5試合が1点差という、稀に見る接戦&波乱の連続となった今年のインターハイ。決勝戦は、今大会を象徴するかのように、どちらが勝っても初優勝という、広島の崇徳高校と岡山の作陽高校の、中国地区対決となった。

先鋒戦から勝負は動く。崇徳高校は野々内悠真が内股などで作陽高校の安達健太を攻め込み、安達から「指導2」を奪って優勢勝ち、1点を先取。次鋒戦は崇徳高校の香川が「指導2」のポイントを取った後も攻撃の手を緩めず、終了間際に大内刈で「技有」から横四方固に抑え込み、合わせ技で一本勝ち。エースの役割をしっかりと果たし、大きな二勝目を奪い取った。

▲崇徳高校のエース、次鋒・香川が大内刈「技有」から横四方固に抑え「一本」

作陽高校は、中堅戦でポイントゲッターの安田が「指導2」の優勢勝ちで1点を返して2―1とし、副将戦以降に望みをつなぐ。副将戦は崇徳高校が三村暁之、作陽高校は野地優太。ここまで、両者の試合を見る限り三村が有利と思われ、三村が内股などで攻め込んで優位に試合を進めるも、決定的なポイントのないまま終了。勝敗は、2―1で崇徳高校優勢のまま大将戦にもつれ込んだ。

作陽高校・寺尾が一本勝ちで勝てば代表戦という局面。準決勝の国士舘戦では、実際に寺尾が一本勝ちを決め、逆転勝利の立役者となっているので、ここでも大きな期待がかかった。しかし、対する崇徳高校の貫目純矢は2年生ながら、昨年の全日本柔道カデ選手権大会で優勝している実力者。寺尾の抱きつきの小外刈をしっかりと警戒しながら、強気に前に出て守勢になることなく4分間を戦い抜いて引き分け。この瞬間、崇徳高校の初優勝が決まった。

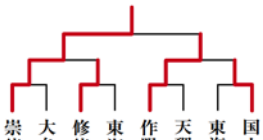
▲見事、インターハイ初優勝を果たした崇徳高校

有力視されていた三強が決勝までにすべて姿を消し、広島と岡山の高校による決勝対決になることを誰が予想しただろうか。比較的、番狂わせが少ない競技と言われる柔道だが、今回の結果については番狂わせ、予想外と言えるだろう。しかし、崇徳高校にしても、作陽高校にしても、「日本一」と言っても過言ではない稽古を積んでいるチームであり、優勝に値するチームであることは間違いない。

20年以上も関東圏の高校の優勝が続き(最後は平成三年の天理高校)、地方ではなかなか強くなれないと思われてきたが、今回、崇徳高校が優勝し、そして作陽高校が準優勝したことで、地方の高校でも優勝できる、強くなれると証明できたことは、地方の高校生、あるいはこれから高校に進学していく小・中学生にとっても大きな励みになっただろう。

「優勝の実感はまだありません。地方にいて強い選手を作りたい、地方の時代を作りたいと、それを目標にずっとやってきました。そのためには、選手一人ひとり、それぞれにあった技をしっかりと作る。高校で完成させるのではなく、将来ステップアップできるような選手を育てたいと思って指導してきました。東海大相模戦は、オーダー的にもうちが有利だと思っていました。実際に勝ったら、選手達が盛り上がってしまって。なので、ちょっと怒って、今日は気持ちを引き締めて臨みました。皆、私の言うことをよく聞くというか、純粋なんですよね。今日も『やるぞ!』と言ったら、すっかりその気になって。よく頑張ってくれたと思います」(加美富章監督)

平成25年度全国高等学校総合体育大会(インターハイ) 柔道競技大会 男子団体戦の結果



優勝	崇徳高校
準優勝	作陽高校
3位	修徳高校
	国士舘高校